

# 外部思考 = 感覚器官としての異文化・フィールドワーク： ピナトゥボ・アエタとの40年の関わりで目撃した 変化と持続，そして私の覚醒

清水 展

## はじめに

表題に掲げる「外部思考・感覚器官」という言葉は奇異な印象を与えるかもしれない。あえてその言葉を使ったのは、本稿の言いたいこと、主張と結論が凝縮されているからである。私が専門とする文化人類学は、異文化で長期のフィールドワークを行い、われわれとは別の世界（宗教的、文化的、経済的に異なる社会）の成り立ち方、生活の様態を民族誌として報告する。そして他者の理解と自他の比較をとおして、個別の文化・社会の特殊性とヒトとしての共通性・普遍性の両方を明らかにし、ヒト（人間・人類）とは何かを考える学である。個人的な実感としても、異文化でのフィールドワークによって愚鈍な私でも蒙を啓かれ、思考を促され、自文化の言語の牢獄と常識の檻から逃げ出し、自由な発想と思考と行動が少しばかり可能になった<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 外部にある思考・感覚器官は、AI（人口知能）が急速に進化している現代において、コンピューターが外部記憶装置であることを意識した比喻でもある。コンピューターはわれわれが保持する過去の情報を大量に保存し解析する。それを念頭に置くと、異文化はわれわれとは違った風に世界の在りようを感じ考え、それに応じた社会を作り上げている。言いかえれば、われわれは自文化・社会の制約のなかで、偏りのある感受性や思考法に縛られて生きている。そのために今までの惰性でモノゴトを考え感じがちである。しかし異文化のなかで暮らし学ぶことをとおして、自文化のなかだけでは思いもつかず考えもしなかったような「想定外」の人間の生き方や社会の作り方の可能性を知る。それは個人的には私が自由になるための導きとなる。が、同時に自文化・社会を違ったように作り上げてゆくためのオルタナティブな発想と思考の訓練ともなる。ジョン・レノンの名曲「イマジン」が誘う世界への入り方の一つになる。

また異文化を外部という言葉で抽象的に言いかえたが、グローバル化が進む現在では異文化、

副題の「変化と持続」というキーワードは、1986年に東京大学に提出した博士論文の題目である（『変化と持続：ピナトゥポ・アエタ社会における出来事の受容をめぐって』）。それを英訳して出版した民族誌 [Shimizu 1989] と日本語の改訂版 [清水 1990] の両方のサブ・タイトルでもある。博士論文や日英民族誌と同じキーワードを用いた本稿は、初発の問題意識や志を大事に育んできた証といえる。しかし皮肉をこめて厳しく言えば、進歩のないぐるぐる回りを続けてきただけかもしれない。コインの裏表として、一方で粘り強さと誠実さ、他方で頑固一徹、愚直、不器用さの表れなのであろう。おそらくその両方の側面があり、どの部分に着目するかによってどちらとも言えるだろう。

### 1. 内省的報告と考察の射程：長期関与で分かったアエタの生存戦略とレジリエンス

アエタとは西ルソン・ピナトゥポ山麓の一带に住むアジア系・ネグリートの自称である。低身長と暗褐色の肌、縮毛などを身体的特徴とする先住民族であり<sup>2</sup>、山麓一帯で2万人余りが移動焼畑農耕を主たる生業としながら暮らしていた。1977年7月に私は南西麓のカキリンガン村を予備調査で初めて訪れ、その年の10月から20か月にわたり暮らした。そのときにお世話になった人たちとの交友関係を40年以上にわたって続けてきたことは自分でも驚きである。その間に彼らの生活スタイルと意識が大きく変わった。しかし同時に変わらずに続いている部分もある。そのことは、私についても同様に言うことができる。

---

具体的には日本人マジョリティとは異なる言語・意味世界を生きる人たち（国際結婚・移民難民・出稼ぎ労働者）が私たちの隣人として暮らしている。日本社会の均質性はますます弱まり、列島の島嶼内にまだら模様にも多様な文化コミュニティーができてきている。そうした人たちとの交流が日本社会に多様性と柔軟性をもたらす触媒となる可能性に期待している。

<sup>2</sup> かつては少数民族、カルチュラル・コミュニティーなどと呼ばれ、人口の9割以上を占める平地キリスト教民と異なり、フィリピン全土で100近い異なる民族集団のひとつである。噴火後にアエタが先住民としての強い自覚を持つようになったのは、NGOなどによるエンパワーメント・セミナー等によるところもある。と同時に先住民権利法が1997年に成立し、全土で先住民の自覚と運動が高まってきたことと関係している。

## — 40年の歳月を超えて—



写真1 幼い頃のエレナ・セラーと、彼女の父親が村の横を流れる川で突いた川ハゼとウナギなど。ゴーグルやゴムバンド付きの銚は、米軍クラーク基地のゴミ捨て場で回収したガラス破片、ゴムバンド、細い鉄棒で作られている。父親のパン・ガタイと気が合い、毎日のように彼の家を訪ねて話に興じた。1978年4月。



写真2 それから40年の後に、日本人美容師の団体・ウッディーチキンが散髪ボランティア活動に来た際に手伝いをして触発されたエレナは、そのまま3ヶ月ほど居残って指導してくれたボランティアの青年 新（あらた）君から3か月ほど集中的に美容技術を学んだ。その後に地元のサン・ナルシソ町の美容院で修行をした後、日本の小さなNGOのNEKKOから支援を受けて友達と小さな美容室を開いた。エレナに散髪をしてもらう私。2019年8月20日。

私と彼らの関係が長く続いたいちばんの理由は、1991年6月15日のピナトゥポ火山の大爆発によって彼らが故郷の山からの避難を余儀なくされたこと、そして避難生活からの生活再建の歩みに私自身が深く関わってきたからである。噴火が起きるまで彼らは山中で焼畑を主たる生業として補助的に狩猟採集や川で魚取りをしていた。しかし噴火後には一時避難センターやテント村住まいを経て、政府が造成した9箇所「高地民（アエタ）」用の再定住地で新しい生活を始めた。私は被災した彼らの緊急医療支援や生活再建のプロジェクト支援をする日本の小さなNGOの現地ボランティア・ワーカーとして深く関わった。当初は調査者・研究者であることを忘れ脇に置いて、ボランティア活動に専念した。4、5年を過ぎた頃から、アエタ被災者の生活再建が軌道に乗り、アエタの生活と意識、コミュニティーが急速に変容していった。その変貌ぶりの過程を身近に目撃することは私にとって安心と喜びとなった。気が楽になり、噴火前後の彼らの体験談、生活の苦労話、その他の自由な語りの聞き取り調査を始め、それを本にして出版した。

2011年からは科学研究費補助金が採択され、以降、研究調査のために毎年のように現地を訪れた。彼らの生活再建の過程におけるコミュニティーの変貌（文化社会変容）のダイナミズムに関する調査をした。科研費プロジェクトを申請した当初の目的は、噴火から20年を経て大きく変貌したアエタ社会の現況を調査研究するためであった。プロジェクトの意義としては、阪神淡路大震災（1995/1/17）の際に強調された「創造的復興」の内実を、先例であるアエタの事例を手がかりとして豊かにイメージし、来たるべき東海や中南海の大地震からの復興の参考にするというものであった。2010年秋に申請書を提出し、翌2011年4月初に採択の決定通知が届いた。東日本大震災から1か月も過ぎていなかった。

ピナトゥポ火山が大爆発した1991年6月15日は私の40歳、不惑の誕生日の当日であった。そして噴火から20年後の彼らの創造的復興の歩みを調査研究したいとのプロジェクトの科研申請の採択通知の直前に東日本大震災が起きた。ピナトゥポ火山大噴火とアエタの友人たちとの強い因縁を感じた。私自身の主体的な意志を超えて、見えざる大きな手に導かれ、出来事の急速な進展の渦中へと巻き込まれていった。それが正直な実感である。

噴火からあっという間に過ぎた30年近くを振り返れば、たまたま噴火の1か月半前、1991年3月末からサバティカル休暇で私は1年間のフィリピン

滞在を始めていた。自分が研究者になれたフィールドワークでお世話になったアエタの友人たちが被災し、辛く大変な思いと生活をしているのに知らぬ顔をするなどできなかった。それで私は、アエタ被災者の生活再建の歩みを支援する日本の NGO (AVN—アジア・ボランティア・ネットワーク) のボランティア・ワーカーとなった。そして数年は春夏秋冬休みなどを利用して日本とフィリピンを往復しながらボランティア活動に専心した。その後も彼らの急激な変容を継続的に目撃し時には個人的に手助けする同伴レポーターとなった。結果として彼らの復興と再生より正確には新生と呼ぶべき変貌の過程をつぶさに目撃することができた。それは地球上の多くの民族が経験した、狩猟採集から移動焼畑農耕、定着農業、さらには産業革命以降の工業化と賃労働という数千年から数百年ほどの歩みを、わずか 10 年あまりで経験するという凝縮したものであった。

噴火前の彼らの生活は、狩猟用の弓矢と焼畑その他のための万能のナタ(ブッシュ・ナイフ)という技術制約のために、結果として自然生態への負荷をほとんどかけなかった。ピナトゥボ山麓でほぼ自給自足の生活をしてきた彼らの文化と社会、自然観、世界観、時間観念、歴史意識は、すべて日本での常識と違っていた。民族誌のあとがきで次のように記している。

電気もガスもない村の暮らしは、「事件が起こらない限りは単調な日々の繰り返しなかで、日本にいるときとは全く異質な時間が流れた。無為の快感は異文化のなかで暮らす緊張感と混じり合い、精神の解放と覚醒とが同時にもたらされた」。[清水 1990: 381]

噴火の後には、そうした社会は一変し、被災したアエタは生活再建のための苦闘をおとして、自分たちもフィリピン社会の一員でありフィリピン国民としての自覚を持つようになった。とともに今ではフィリピンと呼ばれる島嶼地域に最初に渡来した先祖の末裔としての先住民としての強い自覚と意識も併せ持つようになった。彼らは、噴火の前には日本人とは大きく異なる他者として私の感覚と思考を刺激する存在であった。噴火の後には、人類の歴史を圧縮して経験した隣人となった。そして今や、グローバル化時代の国際的なネットワークのなかで生きていることを自覚し、それに対峙便乗しようとする我らの同時代人である。彼らの個人的な変身すなわち意識と世界観の

変化、そしてコミュニティとしての変容の過程は、人類史とグローバル化または人新世と呼ばれる今を考えるうえで貴重な示唆を与えてくれる。否、極言すれば、彼らが私の代わりに感じ、考え、示してくれている。付き合い始めた当初のエキゾチックな他者としての魅力から、噴火の被災によって強いられた彼らの変化変身の過程のダイナミックさに私が強く惹かれ、導かれ、教えられ、結果としての40年のお付き合いとなっていた。

1991年6月のピナトゥポ火山の大噴火は、彼らにとって「世界の終わり」であった。山を下り、学校や教会、公共建物などの一時緊急避難先で1、2週間を過ごした後、テント村での避難生活を数か月送った。雨季が過ぎ雨が明ける頃から政府が造成した9箇所のアエタ用再定住地に移住した。そこでの生活再建の苦難と苦闘を経て、彼らの社会の生活スタイルと意識の多様性が大きく広がった。山に戻って噴火以前と同じように移動焼き畑農耕を主たる生業とする者たちがいる。他方、再定住地で、さらにそこを出て平地民の村のなかや近くで、平地民と同じような生活を営む者たちがいる。海外に出稼ぎに行った若者も出てきている。山に戻ったグループは少数であり、多くは平地民社会のなかで暮らしている。個々の家族や個人を見ても、安定した雇用があれば賃労働者として平地民社会のなかで暮らし、雇用を失えば一時的に山での暮らしに戻る者が少なくない。

アエタ・コミュニティー全体としても、また個人としても生業と生活様式の多様性が噴火後に劇的に拡大した。そうした選択肢の多さを確保したうえで、個々人の生活戦略が一所定住や一職専従ではなく、生業手段の多様性と最大活用にあるという基本は噴火前と変わらない。すなわち時々にもっとも効率的に食糧や現金収入を得るために最適の方法を選択し行動している。そうした生存戦略について、かつて私はNGOによって進められた定着農業による開発プロジェクトについて、それが既存の生業システムを根本的に変えることなくその一部として受容された経緯について詳細に分析した〔清水1990: 67-115〕。そして開発プロジェクトの受益者が彼らにとって新奇な生業である定着犁耕農業を旧来の生業システムの一部として部分的に選択的に受容する様態を「併存的受容」と呼び、「彼らの生業システムの特徴は、多様性の確保とその最大限の利用ということにある〔*ibid.*: 115〕」と指摘した。また旧来のシステムを捨てたり大きく変えたりすることなく、そのなかの一部として受け入れることによって、結果として多様な生業手段の選択肢を確



保していることを「重層的並存」をキーワードとして次のように説明した。

新しい生業手段の導入はそれ以前の生業を放棄させるものではなく、ひとつの有力な選択肢を加えるにとどまる。そうした幅広い選択可能性のなかから何を選んで力点を置くかは、その時々状況によって柔軟に決定される。大林が東南アジア諸社会の歴史を通じて認められるパターンとして指摘した「重層的並存」[大林 1984: 11-12] という現象がひとつのグループ、さらにはひとつの家族のなかに見いだされるのである。[清水 1990: 8]



写真 3 1メートルほどの間隔を空けて植えたトウモロコシが20センチほどに成長した後、同じ焼畑に掘り棒で穴をあけ、陸稲を数粒ずつ播いてゆく。トウモロコシが早く成長して収穫ができ、陸稲と生育時期が異なるために焼畑の有効利用ができる。伐採せずに残した樹木の根本には豆類を植え、蔓が這い上がる。1977年6月。

さまざま食糧獲得方法の保持というアエタの基本的な生活スタイルかつ生存戦略は今も変わることがない<sup>3</sup>。すなわち噴火前に主たる生業であった移

<sup>3</sup> アエタ社会の生存戦略では生業手段（食糧獲得方法）を多種多様化してリスク分散を図り、一方で生きてゆくための最低限の食糧を確保する方途を保持しつつ、他方で多少のリスクを取って最も効率の良い生業を選んでいる。これと関連してすぐに思い起こされるのは、かつて1980年代に開発経済学、政治学、文化人類学、歴史学などを巻き込んで激しい議論がなされた「スコット vs ポブキン論争」である。年ごとの収穫が不安定な生態環境と経済条件のなか最悪の場合でも生き抜くこと、つまり生存を最重要視して行動する「モラル・エコノミー」か、それともリスクを取ってでも自己利益を最大化しようとする「合理的農民」か。東南アジアの農民の

動焼畑農耕と採集狩猟活動を伏流水のように維持しつつ噴火の数年後には復活させ、さらには建設工事現場やインフォーマル・セクターでの賃労働などを有力な選択肢として加えていった。そして故郷の山を下りて平地民（キリスト教徒）社会に接して造成された再定住地に暮らすなかで、子どもたちは学校に通い大人たちは平地民との日常的な接触と交流をとおして、先住民としての民族的な覚醒とアイデンティティを強化していった。それは噴火後の生活再建や復興といった枠組みを超えて、先住民としての誕生や創出と呼ぶことができる。復興支援の NGO によるエンパワーメント・セミナーなどとおして、フィリピンに最初に渡来した民族の末裔としての歴史意識は過去に深くさかのぼり、同時に海を越えた支援のネットワークの広がりに応じて空間認知はフィリピンを超えて大きく拡大していった。

彼らの復興の歩みを簡単にまとめれば、ヒトが数千年前に狩猟採集から農耕へと生業を転換させ始め、イギリスで 250 年ほど前に始まった産業革命が地球上の諸社会を工業化と賃労働・貨幣経済に組み込んでいった歴史を、10 年から 20 年で圧縮して追体験していった。ただし彼らの変化の大きな特徴が「重層的並存」にあることはあらためて強調しておきたい。選択肢の多様性があり状況に応じて活用してゆくことがアエタ個々人の生活力を裏付け、自身を頼む自律性と誇りを下支えし、コミュニティ全体に柔軟で強靱な持続性を与えている。サステナビリティが着目され SDGs がさまざまに議論されている今日、20 世紀最大規模のピナトゥポ山大噴火による被災を乗り越えたアエタ社会の経験から学べることは少なくない。

## 2. 産みの苦しみとしての自然災害

マニラ湾を抱くバターン半島から東シナ海（西フィリピン海）に沿ってパンガシナン州のリングエン湾まで、西ルソンの海沿いを南北にサンバレス山地が連なっている。ピナトゥポ山はサンバレス州の南部に位置し、東側にパンパンガ州とターラック州、西側にサンバレス州を臨む。噴火前の標高は

---

行動の動機づけの理解をめぐる対立と難しい議論の応酬が、アエタにおいてはみごとに調停され、並存または混融している。アエタの実践理性のほうが象牙の塔の学者たちの科学的理性よりも現実に即して適格的であるようだ。



1610メートルであった。噴火によって頂上部が吹き飛び、また崩落して数十メートル低くなり巨大な火口湖ができている。その東西の山麓の一帯には、移動焼き畑農耕を主たる生業とするアエタがおよそ2万人弱住んでいた。

ピナトゥボ山に接する東側の麓にはアジア最大のクラーク米空軍基地があった。6月15日の大噴火の数日前に、米兵と家族らは自家用車とバスを連ねて基地を脱出し、スービック海軍基地へと一斉に避難した。少数の警備兵を残して基地がもぬけの殻となった次第を見て、地元町村は噴火が必至であることを再認識した。それまでも噴火警報を伝え下山して避難するよう呼びかけていたが、それに応じずにピナトゥボ山中や山麓の集落に残っているアエタに対してあらためて伝令を派遣し、山からの避難を繰り返し呼びかけた。多くのアエタが説得に応じて噴火の直前に山を下りて避難した。しかし、南西麓では山を下りずに山中の洞窟に逃げ込んだ100余名が火砕流に焼かれて亡くなった。

山を下りて地元町村の学校や教会、公共建物などに一時避難した南西麓のアエタたちは、2、3週間後にはサン・マルセリーノ町やカステリホス町の近郊に何箇所か設営されたテント村に移り住んだ。ちょうど雨季が始まる頃であった。テント村での生活は雨が降れば地面は泥濘と化して衛生状態が悪化した。公衆トイレを嫌って屋外で排便するために浅井戸が汚染し、下痢が蔓延した。下痢で体力を失ったところにインフルエンザや麻疹など、免疫を持たない伝染病が流行し600人ほどが命を落とした。

雨季が終わり1991年の年明け頃から、アエタ被災者たちは政府が造成した9ヶ所のアエタ用再定住地に移り住み、新しい生活を始めるようになった。生活の糧は初めの1~2年ほどは救援物資の配給に頼り、次いで政府やNGOの失業対策事業（Food for Work, Cash for Work）が食糧や現金の獲得手段となった。併せて手工芸品作りや養豚などの生業プログラムがNGOなどによって実施された。しかしそれらはデザインも品質も市場での競争力がなく、支援のNGOが優先的に買い上げてくれる以外に販路をもたなかった。段階的にプロジェクト資金が減り、数年を過ぎて支援が終わると、ほとんどが生産を終了してしまった。各種の生計プロジェクトが失敗したために、生活の糧は賃労働者として近隣農家や再定住地の整備事業、町の建設現場、その他さまざまな雑業で不定期に雇用されて現金を得る生活となった。それだ

けでは不十分なので時に山に戻り、噴火前と同じように移動焼畑農耕を行ってイモ類や豆類を植えて食糧を確保していた。噴火から数年が過ぎると山腹や山麓に厚く積もった火山灰が、雨季の大雨のたびに斜面を流され押し出され、植生が急速に回復し焼畑が可能となった。

本節以降では、カキリガン村アエタたちの噴火被災の前後合わせて40年あまりの歳月を、現場のディティールにこだわり、私自身の関与の経緯と認識の変化についても触れながら報告する。主張したいことは単純である。本節のタイトルで述べているように、自然災害は確かに被災者に辛く悲しい思いと厳しい生活を強いる。が、それから立ち直ろうとする企てをとおして、被災者=victims は生き抜いた者=survivors となり、さらに被災前とは違う世界観・歴史観・自己意識・アイデンティティを獲得して新しい人間となってゆく。実際アエタ被災者は、少なくともカキリガン村と近隣地域に住んでいたアエタのリーダーや若者たちは、実際にそうした創造的復興をなしとげていった<sup>4</sup>。自然災害は被災者とコミュニティをポジティブに変えてゆく契機となりうることを彼らは身をもって示してくれたのである。

そうした復興が可能になったのは、私がフィールドワークをしたカキリガン集落では、1970年代の後半からキリスト教関係のNGOが定住生活と小学校教育（子どもたちの成長とともに後には町の高校に通うための奨学金支援）、それに加えてブルドーザーで畑造成し、水牛を配布して常畑農耕の技術指導をしたからであった。ディレクター以下数人のスタッフが家族とともに村で暮らし、アエタたちに親身の指導と支援をした。噴火前の15年間にわたる各種プロジェクトの試行錯誤の積み重ねは、そのときどきでは失敗と言わざるをえないことも多々あった。が、結局は他の地域のアエタ・グループと違って、新しい人間と社会を創り出す基礎力や潜在能力を育んだ。

そしてアエタ社会の変容とともに報告したいのは、アエタ被災者の緊急医療支援から生活再建、社会復興に関わることをとおして、私自身も大きく変えられ、新しい人間となり新しいスタイルの調査・研究を模索する人類学者となっていった経緯についてである。

<sup>4</sup> あらゆる災害には、そういう側面や可能性があること、だから防災や減災とともに、被災後の復興が大事であり、その局面に人類学や社会学の専門家も積極的に関わってもらいたい、というのが本章の結論と私の主張のひとつである。

### 3. 復興のための NGO ボランティア・ワーカーとなった経緯

私の専門は文化人類学である。1960～70年代の梅棹忠夫と中根千枝、1970～80年代の山口昌男らの活躍をとおして、60年代から80年代にかけての人類学はまさにピカピカに輝いていた。そんな人類学に惹かれて学部と大学院で人類学を学んだ。大学院の博士課程に進学した1976年の秋にはフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学のフィリピン文化研究所に留学した。1年後の77年10月から79年5月までの20か月のあいだルソン島西部ピナトゥボ山南西麓のカキリガン村で暮らしフィールドワークを行った。それから10年かけて博士論文を書き、さらに3～4年をかけて英語と日本語で民族誌を出版した。それらの仕事がひと段落したときに、たまたまピナトゥボ山が1991年6月に大噴火した。その年、私は3月末から1年間のサバティカル（研究休暇）でフィリピンに来ていた。

その前から私は、メインのフィールドワークを終えた後にも夏休みや春休みに1か月くらい別のテーマの調査研究でフィリピンに滞在する機会があるときには、必ずカキリガン村の友人たちを2～3日訪ねていた。彼らの生活と社会の変化を定点観測する目的もあったが、調査というよりも故郷の村への帰省といった軽い気分だった。そのときもマニラに着いて大学への挨拶やビザの手続きを済ませた後、すぐにカキリガン村の友人らに会いに行った。マニラを早朝に出るバスに乗り、車内に入ってきた新聞売りから朝刊を買ったら、ピナトゥボ山が噴煙を上げ始めているとの記事が出ていた。カキリガン村に着くと、長老たちが集まって輪になって座り、話し合いをしていた。ピナトゥボ山が怒って煙を上げている、どうしたら良いだろうかと。ピナトゥボの神の怒りを鎮めるために、鶏を供犠したり祈りを捧げたりした。

振り返ると1年間の研究休暇でフィリピンに着いて数日してピナトゥボ山に向かった時、噴火の兆候がおそらく初めて新聞で報道された。実際に大噴火が起こった6月15日は私の40歳、不惑の年の誕生日であり不思議なめぐり合わせを感じた。孔子は、「吾、十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る」と説く。この「40は不惑の歳」という定言に後押しされて、エイ・ヤアとアエタ被災者たちのための災害救援活動をする日本のNGOのボランティア・ワーカーとなった次第である。

もっとも噴火の後にすぐにボランティアとなって駆けつけたわけではなかった。噴火の当日はフィリピン全島のなかでは北のルソン島と南のミンダナオ島にはさまれた多島海ヴィサヤ地域にあるパナイ島北部アクラン州のドゥムガ村にいた。噴火の翌日の早朝6時過ぎには、空から細かな灰が静かに降ってきた。10分か20分ほど続き地面をうっすら灰色の点々で覆っていった。マニラ空港は滑走路に積もった灰のために3週間ほど閉鎖され、すぐに駆けつけることができなかった。ドゥムガ村で数日を過ごすうちに、噴火前後にラジオにかじりついて聴いていたときの切迫感が薄れた。噴火によって一帯の住民は避難を余儀なくされたが、人命の被害はさほど多くはなさそうと知って安堵した。

それで当初の調査研究計画を無視して直接に災害救援活動などに関わることに不安や躊躇を覚えた。人類学者は「観察」することが仕事なのだから、ある程度の距離を置き、冷静に事態を見ることが大事だなどと思いなおし、自分に言い聞かせたりした次第である。当初の興奮や危機感が失せて、逃げ腰ヘッピー腰になっていた。

そもそもサバティカルでフィリピンに出かけたのは、「フィリピン大衆文化と政治意識・政治運動」というテーマの研究を本でなくて現場でするためであった。映画、音楽、演劇などを政治的な現状認識を直接間接に表現をするものであり、文化領域における政治として捉え、自分もそうした文化に浸って楽しみながら研究をしたいと願った。お気楽路線に聞こえそうだが、それなりに真面目に考えてはいた。研究計画書には、20年にわたるマルコス大統領の権威主義体制を倒したピープル・パワー革命（1986年2月）を分析した拙著『文化の中の政治』[清水1991]で試みた、草の根レベルの政治意識を具体的な大衆文化の諸相のなかで読み解く試みに挑戦するという目的を書いた。

しかし結局は、大衆文化と政治というテーマの調査はすっぱり断念して、アエタ被災者の医療救援をする日本の小さなNGOアジア人権基金の現地活動組織、アジア・ボランティア・ネットワーク（AVN）のボランティア・ワーカーとなった次第である。たまたまパナイ島からマニラに戻ってきて、定宿としている国立フィリピン大学キャンパス内のゲスト・ハウス／ホテルでアジア人権基金の有光健ディレクターとお会いして意気投合したのが最初のきっかけだった。同基金は、アジア地域における貧困や飢餓といった肉体的

苦痛を受けている人々や、強権政治などによって言論や行動の自由を奪われ精神的・身体的苦痛を受けている「良心の囚人」などを救済するために1987年11月に神戸で開かれたアジア人権フォーラムで設立が提唱され、90年12月に民間基金として発足した。

その設立にあたっては、社会党の土井たか子党首のイニシアチブと後押しがあったという。土井たか子は1986年に社会党委員長になり（日本で初の女性党首）、1991年に辞任するまで「おたかさんブーム」や「マドンナ旋風」を引き起こし、社会党の躍進を牽引した。彼女の在任期間（1986/9～1991/7）は、ピープル・パワー革命（1986年2月）で20年におよぶ開発独裁を続けたマルコス政権を打倒したコラソン・アキノ夫人の大統領在任期間（1986/2～1992/6）とほぼ重複している。しかし発足の当初の基金には必ずしも十分な資金が準備できていたわけではなかった。ピナトゥボ噴火の直後に現地入りした有光氏が、帰国後に久米宏がキャスターを務める報道番組「ニュース・ステーション」に出演し、現地の窮状を写真とともに紹介した。それを見た視聴者から人権基金に寄付金が送られてきて急発進の活動資金となった<sup>5</sup>。

有光氏とともに私も人権基金が借り上げた車で避難センターを何箇所か訪れ、カキリガン村の友人知人たちとも会って話を聞いた。鍋釜と多少の身の回り品とともに山を下りて避難生活を始めた彼らは、故郷を失った悲しみと仮住まいの辛さ、将来の不安などを口々に語った。山での生活では周囲の自然と動植物について何でも知っていて自信に満ちて親切に私を助けてくれた彼らが、避難所ではまったく別人のようになり気落ちして弱々しくなっていた。11月には政府が造成したアエタ被災者のための計9箇所の再定住地（建設中を含め）を有光氏とすべて訪問し、支給される家屋や貸与される農地をはじめ生活基盤に関する基本調査を行った。その知見を日本語と英語の報告書で公表し、アエタ被災者の現状と将来に予想される困難や問題を報告した[清水1992, Shimizu 1992]。

<sup>5</sup> ピナトゥボ現地の窮状のレポートの後に久米が、「こうした報道の後には善意の視聴者がぜひ寄付をしたいからその方法を教えて下さいと電話が殺到することが多いです。今回の報道は被災者の窮状をお伝えるためのものですが、やはりお問い合わせの電話が来ることが予想されますので、そういうお気持ちをお持ちの方は人権基金に直接に連絡してください」と、基金事務所の電話番号や寄付金の受付口座番号等をテロップで紹介した。

以来、翌年3月末に帰国するまではずっと、帰国した1年目は春夏秋冬の休みを使って、翌年も二度ほど、そして10年間はほぼ毎年必ず一度は現地を訪問し、ボランティア・ワーカーとして活動を続けた。アジア人権基金=AVNの活動は初めは医療救援が中心だったが、前年に設立されたばかりで自力で現地のプロジェクトを推進するための現地のサポート体制が十分に整っていなかった。それで派遣した医師や看護師などは初めの頃は現地では「国境なき医師団」のチームに入って活動した。

6月の噴火の後に現地はすぐ雨季に入って避難先のテント村の地面はぬかるんで不衛生になり、麻疹やインフルエンザの大流行で死者が続出した。集団予防接種による対応策が功を奏するまで、6~700人ほどが亡くなられた。11月になって状況が改善し安定してくると、国境なき医師団は2、3人のモニタリング・チームを残して本隊は12月頃から撤収を始めた。しかしアジア人権基金=AVNは、そのまま残って6、7年にわたり活動を続けた。初めの緊急医療から次に子どもたちの栄養・給食プログラムへ、そしてバキラン再定住地での保健センターの建設、さらには養豚や野菜栽培その他の生計プロジェクトなどへと比重を変えていった。欧米のNGOの多くは被災の最悪期を乗り切ると、さあっと引き上げてゆく。今、ここよりも、もっと状況の悪い被災地が新しく生まれているから、そちらに行かなければならないとの理由である。欧米のNGOは専門とする分野を持ち、それを最大限に活かすために対象地域を短期間で変えてゆく。

それに比べると日本のNGOは小規模で小回りがきく。しかも一度関わり現状を深く知るとなかなか関わりを切れない点が特徴といえる。災害が襲うのは構造的な弱者（貧者、差別や排除をされている者たち）であり、その根本的な問題（社会的、経済的、政治的）に対処しない限りは真の解決にならない、と気づくようだ。アジア人権基金も、そうした日本的な特徴を持っていて、プロジェクトの内容は変わりながら活動を続けた<sup>6</sup>。その間、私も年に

<sup>6</sup> 深刻な問題ゆえに関わった地域やグループへの支援活動を長く続けるという日本のNGOに多く見られる特徴は、日本の人類学者や地域研究者の多くに見られる特徴でもある。そうなる理由は眼前にある具体的な問題と関わった人との絆や縁を大切にしているインティマシー志向のゆえであろう。その弱点は視野狭窄に陥りがちなことであり、より大きな問題や課題、普遍的な事柄へコミットしてゆくための想像力の欠如であろう。しかし文化人類学においては、その弱点が逆に個別具体的な事例への長い関わりをとおして深い洞察を得られることである。かつて未開民族や周辺民族と呼ばれ人々と社会が変化のない「冷たい」状態を保持しているときは、そ



必ず一度は、現地に1か月ほど出かけ、ボランティア・ワーカーとしてお手伝いを続けた。

#### 4. 北京での1年余の生活：はるか被災地を離れて暮らしたりハビリ期間

ただし正直に言えば、そうした活動が惰性のように感じられることもあった。このままボランティアでピナトゥボと末永く関わり続けてゆくことは辛いなあと思い、けれど逆に研究者に戻って被災したアエタの友人知人たちを素材や対象として論文という名の業績稼ぎに利用するというのも嫌だった。この先どうしよう、あらためて大衆文化の研究に戻るかななどとも考えた。そうした時に、たまたま運良く、94年の3月から北京第二外国語大学にある日本学研究中心という日本研究者養成のための修士課程の大学院で教える機会に恵まれた。学部で日本語を勉強した優秀な学生を中国全土から選抜し、日本語で日本文化・社会論を教えるプログラムの教師として国際交流基金から派遣されたのである。

それから翌年7月までの計3学期、1年4か月ほどを北京で過ごした。それが私にとってリフレッシュの期間となった。一人娘の美帆も東京の小学校を卒業した翌日の3月下旬に北京にやってきて、父娘二人の生活を始めた。その当時、天安門事件（1989年6月）の余波が残り、欧米は中国に経済制裁を続けていた。日本はそれほど厳しい外交姿勢を取らなかった。そのためだろう、娘は日中友好のためにという格別の配慮で北京大学附属中学校に特別編入させてもらえた。中国は秋が新学期で、娘の編入は春の第二学期からだった。中国語がまったく分からないにもかかわらず、数学オリンピック出場選手を養成するための特別選抜クラスに入れてもらえた。すでに半年の授業が終わっており、言葉も数学もチンプンカンプンだった。

それ以前、娘は小学校に入学する前にアメリカのボストンで10か月、フィリピン・マニラで2年近く暮らしたことがあった。英語もフィリピン語も現地のデイケアや幼稚園に入れたら2、3か月ですぐに覚えて日常会話に

---

うした長期の関わりゆえに得られるメリットは多くはなかった。変わらぬ社会をいつまでも見続けていることは効率悪く生産的ではない。しかし20世紀の末に東西冷戦が終わった後、グローバル化の波が世界の隅々にまで及び周辺社会を急激に変えていつている現在では、対象社会に長く深く関わり、社会と人々の急激変化に目を凝らす調査の意義は大い。

不自由しなくなった。だから私も気楽に考えて、授業に座っているだけで中国語も自然に分かるようになるから大丈夫、などと無責任なことを言っていた。しかし実際は、中学生くらいになると自然に言葉を習得する力が急速に失われてゆくそうで娘はだいぶ苦労した。しかもその年は、江沢民書記長が天安門事件で失った共産党の威信を回復するために、抗日戦争勝利 50 周年を翌年に大々的に祝うための準備を進めていた。各地の抗日戦争関係の記念館や博物館を改修したり新たに建てたりするとともに、歴史教育のキュラムをアヘン戦争以降に焦点を当てるものに変えた。アヘン戦争以来、帝国列強がいかにか中国人民を苦しめたか、それに対して共産党が激しく戦い、勝利して人民を解放したかという物語が正史として重点的に教えられた。もちろん日本軍が直近でいちばんの悪者であった。

宿舎ではしばしば父娘喧嘩、学校では間接的な反日教育のなか、娘も辛くストレスがたまったよう。しかし、しばし日本とフィリピンを離れ、喧嘩しながらも父娘生活を楽しめたことが互いにとって良かったと思う。娘は小学校入学前から母親と一緒に東京で暮らし、その間に両親は離婚した。7年ぶりに北京で父親と起居を共にしたわけである。小学生のとき、毎年の夏休みには母親と暮らす東京から福岡に住む私のところに1週間ほど遊びに来ていた。しかし互いに少々ぎこちなくて一時滞在のお客さんのように接していた。それが北京では、毎日顔を合わせ、朝夕の食事を一緒に食べ、本音や感情をぶつけ合った。

私にとっても娘と毎日のように一緒にいて、食事を作り喧嘩したり仲良くしたり普通に暮らすことが、福岡とピナトゥボの往復、時々東京の研究会という生活からの一時避難と気分転換になった。北京から戻り、北京行の前の訪問から2年近くが過ぎてピナトゥボを再訪したときには、私がりフレッシュしただけでなく、アエタの生活ぶりも落ち着いてきていた。被災の苦難を乗り越えてより良い明日に向かってしっかりと歩き始めているような気配を感じた。噴火の直後は本当に状況が悪くて、私自身も「アエタの人たちが大変だ、民族の存亡の危機にあります、支援してください」などと叫んだ。実際に通りに出て大声で叫ぶのではなく、新聞や雑誌のインタビューを受けたり、報告会で話したり、記事を書いたりするときに、力が入って自然とそうした語り口になっていた。

けれども北京での生活をはさんでピナトゥボを再訪した時には、そうした

最悪状況から脱し生活の再建と社会の復興に向かう確かな歩みを強く感じた。彼らが弱者や敗者ではなくサバイバー（被災の克服者）であり、フィリピン国民であり先住民としての権利を主張する人間になっているのを見て私も嬉しくなった。そして彼らを訪れることが将来の論文のための資料集めという隠れた目的を持つ火事場泥棒の負い目みたいな感覚も失せていった。またJ. クリフォードが『文化の窮状』[2003 [1988]] で力説する、「消滅」の語りでなく「生成」の語りを必要とするような現実が生まれてきていることを実感した。北京滞在を転機として、その後は復興プロジェクトに深く関与しつつ彼らの意識と社会の変容を目撃する同伴レポーターのような研究者になっていった。

思い返して後知恵で考えると、被災したアエタのそうした側面に目が向いたのは、アエタ被災者たちと私の双方に、いわゆる「死と再生」という経験があったからだろう。アエタの友人知人たちは、噴火による生活基盤の崩壊と故郷の喪失という死と、そこから立ち直り新しい場所で新しい生活を軌道に乗せてゆくという新生を政府やNGOなどの支援を受けながら成し遂げていった。私自身も噴火の前年に離婚届けを出し、翌1991年にフィリピンにゆき、思いがけず噴火が引き起こした激動に巻き込まれていった。ピナトゥボの被災地で文化人類学者としての調査ではなくNGOのボランティア・ワーカーとして働いたのは、一面では個人的な生活の激変とストレス、喪失感からのリハビリ療法になった。

当時は気づかなかったが、アエタ被災者の側の「死と再生」のプロセスとともに、それを目撃する私自身の側の離婚すなわち社会的に構築された世界の崩壊～NGOボランティアワーカー～北京での転地療養という個人的な「死と再生」のプロセスが共鳴共振し合った。拙著のタイトル「噴火のこだま」はアエタ社会とともに私自身の生活の激変と余震を含意している。

## 5. NGO ボランティア :

### 「参与」観察者として被災アエタに関わった経験から

私が専門とする文化人類学のフィールドワークと研究は、世界の片隅の狭い地域・小さなコミュニティーで例外的な事例を集め、重箱の隅をつつくように詳細だけでも、そこで閉じられてしまいがちという落とし穴がある。実際に他のディシプリンの友人から冗談めかしてそのように批判されたこと

が何度もあった。趣味に耽溺して狭い世界に自閉し自足するのではなく、当たり前だと思っている西欧近代の価値観や日本社会の常識に果敢に異議申し立てをする、違った見方、考え方、代替の方途を提起することが大事である。欧米近代の常識や暗黙の前提の虚を突く、比喩的に言えばキックボクシングやK-1格闘技の後ろ回し蹴りのような意表を突くワザで撃つ、または場外乱闘に引き込む。それを意識的にしない限りは、長期で詳細なフィールドワークも、好事家か探偵か、はてまた他人様の生活と心情のなかに入りこもうとするだけの覗き見趣味の世界に墮しかねない。現地に、そして日本の社会へと調査で得た知見と研究の成果を還元してゆくこと、現地と日本でもっと積極的に発言し行動し介入してゆく必要がある。ピナトゥボのアエタ被災者の復興に関わることをとおして、そのように強く思うようになった。

たまたま行きがかりで巻き込まれ、成り行きでどんどん深く関与していったことの結果として、そこに居直りそこから開き直り、この事例にはこうした意味がある、こういう意義があると説得的に説明しなければならない。そうでないと善意のボランティアの自己満足で終わりがかねない。アエタ被災者も変わったが、それに呼応するように私自身の調査・研究のスタイルも大きく変わった。意識的に自覚的というよりも、被災地の緊急救援とその後の生活再建の現場に関わり、右往左往しながらそれでも身体は動いているというようなボランティア・ワーカー+「調査もどき」(現場に身を置いて見聞することが結果として受動的な情報収集となっていた)の活動をしているあいだに、おのずと変わっていった。変わることで初めて気がつき主張したことは、災害の事前の防災や、渦中や直後の減災とともに、被災後の生活再建と復興がとりわけ大事だという点である。

噴火の後にあらためてアエタ被災者と関わった時に、あるいはその前から不思議に思っていたのは、災害研究のことであった。日本の場合には、一番大きな自然災害は地震だろう。古くは関東大震災、近年では東日本大震災が思い浮かぶ。被災者の数から言えば、東京大空襲や広島、長崎の原爆攻撃が甚大な人命被害をもたらした。しかしそれは非戦闘員を狙った戦争犯罪であり人災である。自然災害に関する調査研究のなかでは地震研究、わけても予知に対する期待が官民から寄せられ、大きな予算措置がなされてきた。研究費が潤沢にあると頭の良い人(要領の良い人も)が多く集まり、研究が広がり深まる。しかしそれで地震がどこでいつ起こるかまで正確に予知できるよ

うになったわけではない。ならば地震の予知だけでなく、具体的な防災、そして減災、さらには災害が避けられないことを前提として、被災後の復旧・復興の方途方策の研究などに、もっと多くの研究予算と研究努力が振り分けられるべきであろう<sup>7</sup>。

まず個人的な研究を紹介したい。噴火直後からボランティア・ワーカーとして活動してきた AVN が撤退した後、あらためて友人知人らを訪ねて回り、英語と日本語で 2 冊の民族誌を出版した。*The Orphans of Pinatubo* [Shimizu 2001] と『噴火のこだま』[清水 2003] である。噴火によって故郷の山を追われたアエタの友人知人たちが、再定住地で新たな時空間認識と先住民としての自己意識を得て新たな人間となり、新たな社会を作っていたことに着目し、その経緯を紹介し考察した。

背後のアジェンダとして、ポスト・モダンやポスト・コロニアル理論の影響で抽象的な議論への志向性が強くなっている文化人類学に疑義を呈し、自らの経験を紹介しながら、人々に生きられた現実・現場の問題に積極的に関与してゆくという実践的な人類学を提唱提示した。それは単純に言えば、文字資料のないきわめて古い時代までさかのぼる進化論の人類史再構築という大理論を夢見た書齋派の人類学者 (arm-chair anthropologist) を批判して登

<sup>7</sup> 地震研究に限らず大きな予算は、国の政策の大方針と深く関わっているのは、ある意味で当然のことかもしれない。たとえば私が 2017 年まで奉職した京都大学・東南アジア研究所に関係して、アメリカで地域研究の一分野としての東南アジア研究が 1960~70 年代に隆盛を迎え大きく花開いた時代背景には東西冷戦があった。ベトナム戦争は冷戦下の代理戦として熱戦が戦われた。東側ソ連陣営の弱い腹わたは東欧諸国、西側欧米陣営の弱い腹わたは東南アジアだった。だからアメリカ政府や CIA、民間の助成財団は、政策立案のための基礎知識・資料として地域の総合的理解に役立つことを期待して、ソ連・東欧と東南アジアの地域研究 (area studies) に潤沢な予算を配分した。

アメリカにとって、東南アジア地域の共産主義化をいかに防ぐかが最優先の政策課題であった。そのための政策科学として地域研究は期待され、潤沢な資金を提供された。資金を出すから口も出すというわけではなく、研究テーマにしても研究者の自由が認められた。研究計画がしっかりしていて学問的に評価されれば、調査資金を得てかなり自由に研究ができた。とはいうものの国務省にとっては、あらゆる情報が、たとえば人類学者が山奥に入って、山地民・少数民族と呼ばれる人たちの宗教・世界観、社会・親族構造、リーダーシップと意思決定のメカニズム、生業などを詳細に調査した報告書は直接間接に役立つ。それらが基礎的なデータとして蓄積されてゆき、政策立案の参考情報となることが期待された。

ただし個々の人類学者の多くは左翼リベラルであった。人類学の成り立ちが欧米の植民地主義と深く結びつきつつ、それと一定の距離を保って内にいながら自文化批判や西欧近代への疑義を言挙げする伝統に倅さすものであった。ただし研究がいくら善意で始まり客観的で中立を心がけても、研究者の思いを超えて、成果が流用されたり悪用されたりする側面があった。

場したB. マリノフスキーやF. ポアズらによるフィールドワークの初心に戻ろうという主張であった。ただし英語版の著書ではアエタの若い世代とアエタの将来を憂慮するNGOやフィリピン市民を读者として念頭に置き、アエタ被災者の被災体験ナラティブや噴火前の暮らしの思い出語りを30編ほどタガログ語テキストとその英訳を中心として、私の補足説明と考察を加えて作成した。私が得たアエタの生活と社会の激変に関する理解、彼らの願いや思いを、まずフィリピン側と共有したいと願ったからだった。

さらには、噴火から20年以上関わってきた仮締めのもとめ本を木村周平氏との共編著書として出版した。タイトルは『新しい人間，新しい社会の創造』[清水・木村2015]である。「新しい人間，新しい社会」というキーワードを、「はじめに」と第1章の拙稿の副題の両方で用いている（「先住民アエタの誕生と脱米軍基地の実現—大噴火が生んだ新しい人間，新しい社会」）。そのキーワードが私の結論、もっとも伝えたいことを端的に示している。東日本大震災の後に大きな土木工事をして防潮堤を作ったり、高台を造成して移転したりする従来型の復興が進められてきた。そうではない復興，創造的復興と呼ぶようなものがどのような形で可能か考えたい。それを考えるための資料や参考事例を日本やアジア太平洋地域に求め、その先例から学ぼうとした。そして自然災害を生みの苦しみとして捉えることが基本的な研究姿勢となり、また研究成果の結論ともなった。

## 6. 人類史のなかでアエタの経験を考える

噴火の後のピナトゥポ・アエタ社会・文化の変容、そして先住民としての覚醒とフィリピン国民としての自覚、さらには時空間意識と歴史認識の変容を考えるには、彼らの経験を人類史の長い歴史のなかに置き直して見る必要がある。具体的に言えば、現生人類の始まりの歴史は、ヒトとして約700万年ほど前にゴリラやチンパンジーやオランウータンらの祖先と分かれ、密林からサバンナの疎開林へと少しずつ移り住むことから始まった。そして二本足歩行を始めたことが画期となった。それから現在までの長い歴史の99.9%は、狩猟採集をして生きてきた。現生人類（ホモ・サピエンス）の登場は20万年ほど前で、農業が始まるのは1万年ほど前に過ぎない。700万年前に枝分かれしたヒトは1万年前までは地球上のどこに住もうとほとんど変わり



のない生活をしていた。環境による制約によって利用できる動植物は異なるが、狩猟採集という生業は共通していた。

農耕が始まったことによって生活様式が多様化し社会が複雑化してゆき、文明の興亡が始まるのが約1万年前。さらに大きな変化が産業革命によって始まるのが200年ほど前。ピナトゥボ・アエタは、1970年代の半ばまでは移動焼畑農耕を主たる生業とし狩猟採集で補助的な食糧を得ていた。フィリピンで一番遅れた人々（most backward people）や未開人（primitive people）などと言われていた。けれど長いヒトの進化史のなかに置いてみれば、1万年前に農耕が始まったことも、ほんの一昔前に過ぎない。たとえばヒトの歴史を100m競走でたとえてみれば、700万年の長い歴史の大半は狩猟採集をしていて、農耕を始めた1万前というのは、1/700つまり100メートル競争のゴールの直前、15cmぐらいでラストスパートをかけたということになる。ピナトゥボ・アエタの場合は、ゴールの寸前1cmか2cmの所でラストスパートをかけ、先行グループに追いついたとすることができる。

それまでラストスパートをせずピナトゥボ山中でのんびり暮らしていたのは、移動焼畑農耕でイモ類を栽培して主食とし、補助的に狩猟採集で季節ごとの自然の恵みを活用している限りは、あくせく働かずともそれなりに豊かな生活ができるからであった。多くを望まず、少ない労働で必要最小限の食料を確保する生活は、マーシャル・サーリンズ [1984] によれば「禅の生き方戦略」ということになる。

そうした彼らが噴火で被災し大打撃を受けた後に、旧来の山での生活に戻るのではなく、再定住地で新しい生活再建に奮闘した復興の歩みは驚嘆と敬服に値する。柔軟で強靱な対応力を発揮して新しい社会環境に巧みに適応している。移動焼畑農耕プラス狩猟採集を生業としていた人々が、現代の資本主義社会、市場・貨幣経済の中で居場所を見つけてしたたかに生きている。もちろん多くは、フィリピンの社会構造の下層に位置づけられ組み入れられていった。確かに低賃金、搾取や差別ほかいろいろな問題は厳然と存在している。それでも再定住地でフィリピン国民の一員として学校教育を受けた次の世代の子供たちが活躍するようになってきて、教育をとおして子供の将来に期待するような親たちが増えてきた。

## 創造的復興

災害は、ピナトゥポ山の大噴火に限らず、その社会の一番弱い人たち、排除され周縁化された人たちをもっとも激しく襲う。災害救援のために現地に入り活動をする NGO のスタッフやボランティアは、日々の活動のなかでそういう差別や排除や抑圧や貧困という現実を垣間見ることになる。災害は構造的弱者の現実がはっきりと見え、応答を要請されるきっかけであることに気付く。すると次はそこに深くコミットしていくことになる。たとえば東日本大震災の津波被害の甚大さは想像を絶するほどであった。震災をきっかけにして三陸地方に関心を持つと、その背後には人口の流出と少子高齢化が進む現実があった。それにどう対処するのかを考えないまま、被災前の現状回復へと進むことが創造的復興になるとしたら、何かどこかおかしいと思った。

そこでピナトゥポで見ていたことが創造的復興の具体例の一つであるとしたら、アエタの場合の創造的復興とは何かという問いが生まれる。その答えは今だからはっきりと大きな声で言うことができる。それは新しい人間の創造であり新しい社会の創出である。添付の写真が、そのことを具体的なイメージとして象徴的に示している。サングラスをかけてバイクに乗る青年は、このままアメリカのどこかの町に行けばストリートファッションを身に付けた、ちょっとお洒落な黒人少年になるだろう。彼らは、高校を出た後、職業訓練所で溶接技術を習い、米軍基地が全面撤退した後のスービック湾に進出した韓国の造船会社・韓進に雇われた。いずれ海外出稼ぎに行くことを夢見ており、そのためのチャンスを待っている。実際、同郷の知り合いには溶接工として中東に出稼ぎに行っている者もいる。

こういう若者が、噴火から 10 年 20 年して出てきた。学校教育を受け造船会社で溶接工として働き、海外出稼ぎを夢見て実際に行けるかもしれない技術と経験とガッツを持っている。人間の適応力、可能性、潜在能力の証明といえる。彼らは遅れた未開人ではなく、私たちの同時代人であることを痛感した。彼らは私たち日本人やフィリピンのマジョリティである平地キリスト教民とは異なる歴史発展経路をもち、ピナトゥポ山麓の独自の生活領域のなかで固有の文化を保持してきた。が、今や私たちと同様にグローバル化が急速に進行する時代の可能性と困難に立ち向かっている。



写真4 山に戻って暮らす祖父母に会うためにオートバイに乗って麓まで向かう若者と友達。(2013年1月5日)。

彼らは、私たちとは違う場所で違う歴史と文化に支えられ、ネオリベラル経済が推し進める世界大の規模での社会編成の変動に立ち向かい、ある意味でチャンスには便乗しようとする私たちの同時代人である。もちろん彼らは異なる固有の歴史と文化を保持しており、それによる制約と可能性を併せ持っている。それゆえ日本人とは違う点多々ある。が、同時に現地で彼らと深く接していて、各々の固有の歴史と文化の差異を超えた共通性というものを感じた。それは古い文化人類学の終わりを意味しているのかもしれない。文化人類学は、研究対象の社会・文化が自分の社会・文化と異なっている点、つまり他者性に関心をいだき焦点を当て研究を進めてきた。しかし実はその違う点、さまざまな差異というのは、かつては大きかったかもしれないが、今はそれほど大きくはない。それがアエタとの40年の付き合いを経た現在の実感である。若者たちは今ではTシャツにジーンズとスニーカーというファッションで、マクドナルドやケンタッキーを食べ、DVDや衛星放送でハリウッド映画を観て、アメリカン・ポップスを聞いている。もちろんフィリピン映画や音楽、テレビも大好きである。

それほどまでにグローバル化とネオリベ経済の動力、そして大衆文化の魅力は強い。しかし、もっとラディカルに考えると、かつては実はそれほど差異はなかったのかもしれない。外国人、とりわけ田舎や山奥で異文化を生

きる人たち、異なる言語文化を持ち首都の人たちや欧米・日本の人たちとは違ったように世界を見ている人たちに出会ったとき、私たちと同じか違うか、どちらを重視するかという選択の問題である。

日本財団を創設した笹川良一の有名なスローガンは「世界は一家」,「人類はみな兄弟」である。国境を超え、民族の違いを超え、差異よりも共通性に着目する人間観である。異文化に向き合うとき、他者性を解体するのか、逆に他者性を構築するのか、どちらを重要視し問題化するのか。優等生ならばその答えは、違うところと同じところを丁寧に腑分けして、違いを尊重しつつ同じを大事にして理解を深め協力協働してゆくべし、ということになるだろう。が、言うは易し、行うは難しを実感している。

## 7. 新しい人間、または時空間認識の拡張

災害が産みの苦しみであり、それによって新しい人間と新しい社会が生まれるという私の主張に関して、もう少し詳しく説明をしたい。それは、まずピナトゥボ・アタの個々人が変わる、彼らの自己意識、民族意識が変わることである。噴火の前に、狩猟と移動焼畑農耕を主たる生業としていた頃は、言わばその日暮らしをしていて、1年を単位とするサイクルの繰り返しのなかで生活していた。乾期になれば山の斜面を伐採し、2~3か月放置して乾燥させ、乾期の終わりに火入れをする。雨期の到来とともに芋、トウモロコシ、豆、陸稲などの作物を植える。季節ごとにすべき農作業が決まっており、それを毎年繰り返してゆく。時間は循環し、季節のめぐりに合わせて前年と同じ手順で生活を組み立ててゆく。子供たちも親の生活を見て、仕事を手伝いながら生きるために必要な知識と技術を学んでゆく。将来のことはあまり考えず心配もしない。自然の恵みに対する全幅の信頼感を寄せている。雨期に長雨が続き焼畑にイモを収穫に出ることが困難なときが数日にわたって続く以外には食糧不足に苦しめられることはなかった。

しかし既に述べてきたようにピナトゥボ山の大噴火によって、彼らの生活環境が一変した。山腹、山麓にある焼畑と集落は降り注いだ火山灰・礫に埋まり、そこでの生活が不可能となった。全員が山を下りて避難し、一次避難センターやテント村などで半年あまりを過ごした。その後に平地キリスト教民が住む農村部の周辺に造成された計9箇所の「高地民（アエタ）」用の再

定住地に移り住んだ。それまでピナトゥボ山麓の一帯で、彼らだけの固有の世界のなかでほぼ自足して生きてきたのが、一気にその外部へと投げ出されたのである。その結果、さまざまな他者との接触と交渉が生まれた。子どもたちは学校教育を受け、大人たちも保健省や赤十字や市町村役場や取材メディアや商人や近隣の農民など、平地キリスト教民と呼ばれる人々（フィリピン社会のマジョリティー）と日常的に接触するようになった。

さらには諸外国の政府や国際 NGO が積極的に緊急救援と生活再建のために支援の手を差し伸べてくれ、なかには現場報告と交流のために招かれて外国訪問をするリーダーたちも出てきた。そうしたさまざまレベルの交流をとおして、自分たちを支えてくれる善意の支援者・団体はマニラにいたり、遠く海外の日本やオーストラリアやアメリカや EU にいることを知ることになった。それは、彼らの地理的、空間的な認識範囲が一気に拡大することを意味していた。噴火前の生活では、ピナトゥボ山麓の限られた領野＝空間のなかで自給自足の生活が完結していた。

歴史も彼らの意識に即して見れば、噴火以前には忘れがたい出来事は時系列に沿って連鎖的に編年されているのではなく、彼らの周囲を取り巻き生活の場となっている自然景観の各所に、その目に見えぬ痕跡が刻み込まれていた。それは「現在」を生きる人々の可視空間のなかに埋め込まれ、今を生きる人々の共時態として存在していた。つまり「彼らの歴史は、時間の蓄積としてではなく、空間のなかへ配置されることをとおして、常に潜在的な同時代性を伴って存在して」いた [清水 1990: 36]。

アエタが新しい人間になるというのは、そのように空間認識とともに時間・歴史認識も一変し、拡大することを意味した。噴火前は、焼畑の農耕暦に合わせて一年ごとに繰り返される循環する時間が生活を律していた。それが子どもたちが学校教育を受けるようになると、フィリピンの歴史を学び国民としての自覚を教えられるとともに、個人的にも学年を一つひとつ重ね、小学校のあとはハイスクール（2015年までは中高合わせて4年間、その後 ASEAN コミュニティの創設とともに6年間に）、その後は大学や職業訓練学校で勉強をして、できたら海外出稼ぎにも行ってみたいというような具体的な将来設計として未来を意識するようになった。

その一方で、NGO のエンパワー・セミナーなどを通じて、アエタがフィリピン諸島に渡来した最初の民族であり、その伝統文化を今も保持してお

り、だからピナトゥポー帯の土地の先住権原を持つ真正の「先住民」(*katutubo*)なのだという自覚を持つようになった。先住民であることの自覚は、固有の生活様式と「文化」(*kulutura*)を保持するという自覚と相互に補強しあいながら、強化されていった。つまり民族としては最初に渡来したグループの末裔である遠い過去に遡る歴史意識を持ち、個人としては将来設計を5年、10年の先も考えるような、過去と未来の両方向に延伸された時間意識を持つようになった。

こうした格段に拡張された時空間認識とフィリピン国民であり同時に先住民でもあるとの自覚を持つようになることは、すなわち新しい人間と新しい民族が生まれてきたことを意味する。それは、政府がやっている土木事業中心の復興と違い、英語で言う“Build back better”とも違っている。今までとは違った価値観、世界観を持ち、違った生活スタイルで新しい活躍の場で生き抜く、新しい人間が生まれたということである。それこそが、アエタの「創造的」復興であった。

アエタにしてもフィリピン人にしても日本人にしても、自然災害は潜在的に生みの苦しみでもありうる。関東大震災の後に、後藤新平が帝都大復興のスローガンを掲げ、これを千載一遇のチャンスとして、近代的、モダンな近代都市建設に邁進した。あるいは東京大空襲で焼け野原になった後、戦後の復興の中で東京という新しい都市の姿形が決まっていた。災害は基本的に新しい人間の誕生と新しい社会の創建、つまり生みの苦しみになりうるのだというのが私の繰り返しの主張である。そのようなものにしてゆかなければ、亡くなられた方々が浮かばれない、その死が無駄になってしまう。ただし注意しなければならないのは、そうした災害後の復興が、ここを先途としてそれまでの都市計画を一気に実現するという類のものになりかねないことである。まさにハイパーモダンな近代化、つまり近代主義者がトップダウンで頭の中の理想像を落とし込んでいこうとするタイプの都市づくりや、災害時のパニックに便乗して金儲けに走る事業になりかねない<sup>8</sup>。

そういうプロジェクトをめぐる、地域研究者や人類学者、社会学者が、工学・土木系の基本プランに対して、どういうオルタナティブな見解とプラ

<sup>8</sup> James Scott [1998] の「ハイパー・モダニティー」の議論やナオミ・クライン [2011] の「災害資本主義」の警鐘を参照。



ンを出せるかがとても重要である。ただ反対するだけでは意味がなく、物分りの悪い駄々っ子と見なされるだけである。いかに、有効なカウンター・イデオロギー、カウンター・パンチ、オルタナティブなアイデアとプランを出していくか、ということが、災害復興に関わる人にとって、とても重要だと思う。

## 8. 外部感覚・思考器官としての異文化

あらためて思い起こすと、博士論文のためのフィールドワークをカキリンガン村でしたのが1977年から79年までの20か月。30世帯、250人ほどの小さな村だった。それ以来40年、1991年の噴火からでも30年近くになる。40年のあいだに、初めて会ったときに素っ裸で遊んでいた子供が何人もの孫をもつおじいさん、おばあさんになっている。そんな小さな村と村人のことを40年も追っかけ調査を続けている。なんと効率の悪い調査、研究なのかとあきれられそうである。

しかし大事なのは調査地の大小の規模ではなく、期間の長さでもない。それが大きなコンテクストの中で、どういう意味を持つのか、そこからより一般的な課題に関して、どのように新しいこと、常識と偏見を変えるようなことが言えるかである。今までとは違った風に自文化・社会や現代世界を見なおし、もうひとつ別のオルタナティブな社会と世界を構想(夢想)するための示唆や手がかりを提示できるかである。私自身はそのことを常に意識して調査と研究を続けてきた。この数年は、そうした自身の調査研究スタイルを「巻き込まれ、応答する人類学」という言葉で説明してきた。今まで書き連ねてきたことは、正直に言うと後から振り返っての意味付け、後付けの説明である。リアルタイムでは現場の事態の深刻さの衝撃で頭はほぼ思考停止となり、感情と身体のほうが先に反応して動いた。

アジア人権基金の有光氏と一時避難センターを回ったとき、友人知人たちが意気消沈し困惑しているのに接して、見て見ぬ振りにはできないと思った。もちろん躊躇や逡巡はあったが、現場の事態の深刻さと緊急の対応の必要性が自身の計算や不安を超えて大きかった。NGOのボランティア・ワーカーとして手伝い始めたときには、これほどまでに長い関わりになり、私自身の調査研究スタイルが変えられてゆくなどとは思もしなかった。被災者たち

の状況がどんどん変わってゆき、それに引きづられ、逃げ出すこともできず、巻き込まれていった次第である。巻き込まれながらも、その現場をしつかりと見ることで、現地の友人知人たちから直接に話を聞くこと、教えてもらうことを心がけた。現場を見て、当事者の話を聞いて、そこから、はて、さて、と考え始めた。

地域研究にしても文化人類学にしても、そもそもそういう学問なのだとは強く思う。自身の経験に即して言えば、要領が良く目先が利いて先々が読め、費用効果の計算ができるというのは正反対のアプローチである。自分の頭のなかだけで現状認識と理解が完結しない。まずは相手をよく見て、話しを聞くことから全てが始まる。悪く言えば相手任せ、人の禪で相撲を取ろうとする、と言えるかもしれない。人類学者や地域研究者は、日本では気付かないことが異文化の中で暮らすことをとおして初めて気づくような、ある程度の鈍感さ（日本での常識の囚われ）と、そこそこの敏感さ（異文化への驚き）の両方を持っている。もし鋭敏な感受性をもっていれば、日本で暮らしていても親きょうだいや友達、周囲の人と自分との違いを感じ、他者性や異文化ということを日頃の生活のなかで実感するだろう。詩人はそうした感受性と表現力を持ち併せているだろう。

残念ながら私には詩人の感性や感受性が欠けており、深い思考力もなく、毎日を惰性で生きている。けれども外国の言葉も違う異文化のなかで暮せば、日々が新鮮な驚きの連続となる。その中にいるだけで閉じた目も開けられ、寝た子が起こされ、日本とは違う常識、道徳、人間観、世界観を知り、違う世界の有り様を実感し、それで初めて自分の頭も動き出す。愚鈍な私でも、異文化の中にいればいろいろ感じ、考え始めることができる。要するに、異文化での現地調査とは何かをコンピューターの比喩を使って今風に言えば、外部感覚器官または外部思考装置を駆動すること、極論すればそれに導かれ教えられることによって新しい視野と理解を手に入れようとする企てである。異文化を生きる人々は、自分で感じられない、考えられないこと、私自身の思考と感性の限界を超えて人間の存在と世界の存立の別の形でのあり様を、具体的な現実としてわかりやすく見せてくれ、教えてくれる。

近年、シンギュラリティーが関心を持たれている。コンピューターが加速度的に性能を向上させてゆけば20年か30年後には、人間の頭脳より複雑な仕事ができるだろう、その特異点を超えたら何が起きるか想定ができないと

いう予測である。しかしコンピューターは、基本的に高速高性能の四則演算装置であり、また情報・データを大量保存する外部記憶装置である。ディープ・ラーニングによってある分野では人間の頭脳を超える知的作業ができるようになるだろう。しかし、それが空想から想像へ、そして創造へという断絶と飛躍を可能とするか分からない、というより不可能であろう。(新井2018)

対して異文化は、たとえばピナトゥボ・アエタは彼らの世界観や生き方自体が、私にとっては噴火の前も後も日本人の私の常識外、想定外であり、私にとって新鮮な驚きの連続であった。自分の頭のなかの想定やシミュレーションとは違う、自分では考えられない世界を実際に生きているという意味で、彼らは私にとっての外部感覚器官であり思考器官なのである。コンピューターの比喩を使ったので器官と呼んだが、私の師でありメンターであると言い換えても同じである。私の頭の中は、日本語でしか考えられない。私が生まれ育った日本の文化の常識だけでしか世界を見られない。そういう馬鹿で鈍感で柔軟性がなく頭の動かない私でも現地現場に行けば、違う現実を見て、世界の違った有り様、構築のされ方を実感し学ぶことができる。極論すれば、文化人類学や地域研究や災害復興の支援をすることは、単に知識や情報の量を増やしてゆくだけではなく、また人様のお助けをするだけでなく、知らずに自分自身が変わられてゆく契機となるというのが私の実感であり、学としての魅力である。

### おわりに：フィリピン国民=先住民としての新生と 同伴レポーターの感慨

噴火後のアエタ自身と社会の新生のポイントは、先に述べたように年ごとに繰り返す循環する時間とともに、子供の将来を考えるような直進する時間意識を持ったこと、そして先住民としてはるか遠い過去にさかのぼる歴史意識を持ったこと。つまり過去と未来の長いスパンのなかで今を位置づけるようになったこと。それとともに国を超えたネットワークの支援を理解し、地理的・空間的な認識地図が拡大していったことにある。

噴火後に生まれた若者たちは高校や職業訓練学校を修了してさまざまな賃労働の機会を得て再定住地や町の近くに居を構え、平地民と同じような暮ら

しをしている。その一方で運悪く解雇されたり長期の失業状態が続くと、生きてゆく食糧を確保するためにそこに住みながら10~20キロほど離れた山に行って焼畑農耕をする。農作業があるときは数日のあいだ、畑の近くの仮小屋で寝泊まりし、作業が終われば町の近くの家に戻ってくる。言ってみれば遠距離通勤する一時的焼畑農民となる。そして山にいるときには採集を積極的に行って副食を確保する。

つまり、焼畑農耕と狩猟採集を主たる生業とする生活から、噴火後には賃労働を主たる生業としながら、必要に応じて焼畑農耕や採集（ときには狩猟）という生活へと簡単に戻る。頻繁な移動と食料獲得手段の多様化によってリスク分散を図ると同時に、その時々や場所場所の条件に応じてもっとも効率が良く生産性の高い手段を選択し活用する。基本的な生存戦略が噴火の前も後も変わらずに維持されている。それがアエタの社会と人間の新たな誕生すなわち創造的復興を可能にした。移動（流動性）、多様化、リスク分散がアエタ社会の柔軟で強靱な持続性を生み出し、コミュニティーのダイナミックの存立、存続を可能としてきたレジリエンスの根幹となっている。

産業革命と工業化・市場経済による世界大の包摂という人類史の250年ほどの歩みを、アエタはピナトゥポ噴火の後の10~20年間で急速に経験した。噴火後の30年近くにわたり同伴レポーターとして彼らの変容を目撃し記録することができたことは望外の幸せであった。それは意図したわけではなく、状況の過酷さと事態の進展の速さが引き起こす渦から逃げることもできずに飲み込まれていったというのが実感である。

## 長期にコミットする人類学

カキリガン村で暮らしフィールドワークを始めてから40年を超える。ピナトゥポ山の大噴火によるアエタの友人知人たちの被災と生活の激変のゆえに、結果として、かくも長い関わりと深いコミットが続いた。しかし落ち着いて周囲を見れば、噴火などの災害がなくとも初期に調査をしたコミュニティーとその後も長く深く付き合いを続けているのは私だけではない。本巻の編集者の青山和佳はミンダナオ島ダバオ市のバジャウ・コミュニティーと30年、寄稿者の一人の中西徹はマニラの貧困者のコミュニティーと35年におよぶコミットを続けている。友人の菅原孝はアフリカのピグミーと40年、

浜本満もケニアのドゥルマと40年、熊谷圭知はパプニューギニアと40年である。その他、名前を挙げないが多くの日本人の友人知人たちが特定の地域・コミュニティときわめて長期のフィールドワーク、正しくいえば長く深いお付き合いと研究を続けている。

かつて人類学者の多くが調査したのはアジア・アフリカ・ラテンアメリカ(AALA)などの未開社会(primitive society)と呼ばれるコミュニティーであった。それらは文字通り未だ開かれておらず、旧慣墨守の冷たい社会が十年一日のごとく続いているとみなされていた。そこで長期の調査をしても新たに得られる情報の量が時間に比例して増えるわけではなく、逆に1~2年を超えて参与観察を続けても効率が悪くなるだけと考えられた。ひとつのコミュニティーを惰性で長く調査せず新しく別の文化・コミュニティを調査研究するほうが賢明である、なぜなら新鮮な驚きと知的な興奮をともなって情報を集中的に得ることができるから。そして二つさらには三つの社会の比較をとおして、人間と文化に関する新たな知見と深い洞察が得られる。比較と総合が人類学の基本の方法とされてきた根底には、そうした考え方や前提があった。

しかし東西冷戦が終わりグローバル化とネオリベラル経済が世界中に急浸透してゆくなか、個別具体的なローカルな場で当該社会が急速な変容を経験している。同じ社会であっても10年単位でまるで別の社会のようになっていく。それゆえ同一社会の定点観測という調査研究であっても、対象社会が急速に変わるゆえに時系列のなかでの変化による比較が可能であり大きな意味を持つ。日本人研究者に多い特定コミュニティーとの深く長い付き合いは、一仕事に集中専念する江戸から続く職人氣質のゆえかもしれない。または視野の狭さと要領の悪さのゆえであるかもしれない(自身を振り返るとそう思える)。しかしグローバル化に伴う近年の急激な変容のゆえの結果として、頑固で不器用な研究者の眼前で相手の社会と文化が大きく変わってゆくダイナミックな過程に自らも巻き込まれながら目撃することになる。

理由はともあれ、少なくともアエタに関して言えることは、お付き合いを長く続けてきたゆえに、彼らが臨機応変に大災害に対応し自身と社会を柔軟に作り変えてゆく過程に同伴し、目撃することができた。目撃する以上に、折々に彼らの思いや夢、現状の認識や将来の計画などを聞かせてもらった。世間話の雑談でもかまこまったインタビュー風の質問でも、彼らをよりよく

理解する手がかりとなった。とともに私にとっては災害からの創造的復興を具体的にイメージする助けとなった。さらには急激に変貌する世界の今を考え、来し方行く末に思いをめぐらし、社会の趨勢や常識とは違うふうな明日の世界を夢想するための導きや参照点となってきた。特定コミュニティと深く長く付き合い、そこに凝縮して現れているヒトの柔軟性と適応力に目を凝らし見つめ考え続けることは、人間の潜在力と可能性への気づきを導く。新たな社会を構想するために異文化でのフィールドワークと人類学が貢献できる大きな可能性を確信している。

### 参考文献

- 新井紀子. 2018. 『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』 東京：東洋経済新報社.
- クリフォード J. 2003. 『文化の窮状』 太田好信ほか訳, 京都：人文書院. (原著 Clifford, James, 1988, *The Predicament of Culture: Twentieth-century Ethnography, Literature, and Art*, Cambridge: Harvard University Press.)
- クライン N. 2011. 『ショック・ドクトリン：惨事便乗型資本主義の正体を暴く』 幾島幸子；村上由美子訳, 東京：岩波書店. (原著 Klein, Naomi, 2007, *The Shock Doctrine: the Rise of Disaster Capitalism*, New York: Metropolitan Books/Henry Holt.)
- サーリンズ M. 1984. 『石器時代の経済学』 山内 昶訳, 東京：法政大学出版局. (原著 Sahlins, Marshall, 1972, *Stone Age Economics*, New York: Aldine.)
- Scott, James C. 1998. *Seeing like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition have failed*, New Heaven: Yale University Press.
- Shimizu, Hiromu. 1989. *Pinatubo Aytas: Continuity and Change*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- 清水 展. 1990. 『出来事の民族誌：フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』 福岡：九州大学出版会.
- . 1991. 『文化のなかの政治：フィリピン「二月革命」の物語』 東京：弘文堂.
- 清水 展 (編著). 1992. 『ピナトゥボ大噴火の後で：生存の危機に瀕している先住民民族ピナトゥボ・アエタの現状と人権』 アジア人権基金.
- Shimizu, Hiromu. (ed.) 1992. *After the Eruption: Pinatubo Aetas at the Crisis of Their Survival*, Tokyo: Foundation for Human Rights in Asia.
- Shimizu, Hiromu. 2001. *The Orphans of Pinatubo: Aya Struggle for Existence*, Manila: Solidaridad Publishing House.



- . 2003.『噴火のこだま：ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』福岡：九州大学出版会.
- . 2014.「応答する人類学」山下晋司（編）『公共人類学』東京：東京大学出版会.
- . 2015.「先住民アエタの誕生と脱米軍基地の実現：大噴火が生んだ新しい人間，新しい社会」清水 展・木村周平（編著）『新しい人間，新しい社会：復興の物語を再創造する』京都：京都大学学術出版会.
- . 2017.「巻き込まれ，応答してゆく人類学：フィールドワークから民族誌へ，そしてその先の長い道の歩き方」『文化人類学』81（3）.

## 付記

本稿は2018年5月19日に開催された日本災害復興学会の関西例会「復興とは何か」ワークショップで報告した音声を文字起こしした草稿を全面的に加筆修正したものである。例会にお招きいただき，有益なコメントをくださった大矢根淳会長をはじめ出席者の皆様に心からお礼を申し上げます。

再定住地でのフィールドワークその他の資料収集のために，科学研究費補助金・基盤A「応答の人類学：フィールド，ホーム，エデュケーションにおける学理と技法の探求」(16H01968)の助成を活用しました。

## 文化を聞く（ヒアリング・カルチャー）

文化人類学の基本はフィールドワークであり、そこでの参与観察と文脈に即した理解にもとづき民族誌を書く。しかしフィールドワークと参与観察という方法は人類学の独占ではなく、霊長類学でも同様である。しかし両者の方法は根本的に異なる。サルやゴリラやチンパンジーは、自らの行動や思いについて言葉では説明してくれない。そこで調査者（霊長類学者）が群れの中あるいは近くに身を置いて、目で観察する。もちろん自然の群れを追って観察するだけではなく、群れの餌付けをして近くで観察したり、京都大学霊長類研究所のように飼育してさまざまな実験を行ったりすることもある。

霊長類学に比べると文化人類学の参与観察は、目で観察することと、それ以上に耳で聞くことの比重が圧倒的に重い。習慣や儀礼や個々の行為、その他あらゆることについて当事者から言葉で説明してもらうことが情報収集と理解のためにもっとも重要である。にもかかわらず、人類学の方法をめぐる「文化を聞く」ことにあまり関心が払われてこなかった。J.クリフォード [1996 [1986]] による「文化を書く」ことをめぐる問題提起が引き起こした議論と対応策の模索（試行錯誤？）は、事後的に「ライティング・カルチャー・ショック」と呼ばれる事件となった。J.クリフォードの前には、サイドがオリент（東洋）を支配し再構成し威圧するための西洋の知の様式を「オリエンタリズム」と呼び詳細に分析し鋭い批判を投じている。

しかし「ヒアリング・カルチャー・ショック」は起きなかった。なぜだろう？ それはおそらく人類学者が事前の調査計画や問題意識を優先して、見たいものを見て聞きたいことを聞くことに専心してきたからであろう。現地の人々に向き合い、その声をしっかりと聞き取り、その声に応じてゆこうとする意識が十分でなかった。

確かに人類学者は書くこと、つまりフィールドワークの際にはノートを、母国に戻った後には民族誌（や論文）を書くことに心血を注ぐ。フィールドの参与観察で見たり聞いたりしたことと、それらに関する彼らの説明を参考にしながら、民族誌という文化をめぐるテキストを編み上げてゆく。大学の研究室に戻って執筆しているときに念頭にあるのは、フィールドで対話を続けた人々であるよりも人類学会の内部の先行研究であり、人文諸学の関連研究であり、それらとの間テキスト世界における応酬である。とすればその

## 「文化を聞く」：フィールドでのインタビュー写真



ピナトゥボ山の大噴火(1991/6/15)で山麓の故郷を追われ一時避難センターで仮住まいするカキリガン・グループのリーダー **Victor Villa** 氏に避難生活の苦勞話を聞く。サンバレス州サン・ナルシソ町の近郊で。(1991年11月)



イフガオ州バナウエ郡ウハ村で、棚田の概況と保全のための植林運動について **Amara Banodaen** 氏にインタビューをする。(2016年1月2日)



イフガオ州バナウエ郡ウハ村で、新年を祝い酒を飲み欲談する。住民主導の植林・文化復興運動の指導者ロベス・ナウヤック氏(右)と、彼の運動と言動をドキュメンタリー映画で20年にわたり記録し続けるキッドラット・タビミック監督(中、フィリピン・ナショナル・アーティスト、2015年・第65回ベルリン映画祭でカリガリ賞受賞)、サントス・バユカ氏(ロベスの女婿・キッドラットの友人の木彫り職人・アーティスト)(2016年1月2日)。



サンバレス州ボトラン町近郊の **Luob-bunga** 再定住地の **Poon-bato** 教会で、ピナトゥボ噴火前後の旧 **Poon-bato** 集落の様子を **Conception Publicio** 氏(75)にインタビューする。(2019年8月21日)

討議アリーナで認められること評価されることが目的となりがちである。逆にフィールドにおいて対話を続けた生身の人間同士の関係は途切れ、再びフィールドにもどって対話を再開し、対話とそれに触発される作業を継続してゆくことはきわめて稀である。

私が提唱する「応答する人類学」は単純である。それはフィールドで聞いた声に誠実に応える姿勢を続けようとする人類学である。たとえば私が40年の付き合いを続けるアエタにしても20年の付き合いのイフガオにしても、彼らは今やグローバル化の進行とネオリベラル経済の浸透がもたらす影響のなかで暮らしている。日本に暮らすわれわれと同様に、生活や社会の急激な変化にともなう新たな可能性や困難に直面している。まさしく我らが同時代人である。もちろん、それぞれの地域や社会の発展経路の違いによって異なった制約を受け、異なった困難に立ち向かい異なった可能性に開かれている。が、グローバル化の大波に巻き込まれ、それに対峙したり便乗したりしようとする点で、互いの差異を超えて似たようなゲームをしている。

それゆえ応答の人類学も、異なった場所で異なった歴史発展経路に支えられながら現代世界の共通問題あるいは喫緊の課題に対峙している人々との連携と協力をとおして、解決のための隘路を開く方途を探ることが責務となっている。人類学の課題は、異文化や差異の理解にとどまらず、発展経路の違いと文化の相違を包摂して立ち現れる共通の問題群に対処するために、国境や文化を超えた類似性や共通性を理解し、それを基盤とする連携・協力をとおして、対処や解決の方途を探ることにある。

#### 参考文献

- クリフォード, J.; マーカス, G. 1996. 『文化を書く』 東京: 紀伊國屋書店. (原著 Clif-  
ford, James & G. Marcus, 1986, *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnogra-  
phy*, Berkeley: University of California Press.)
- サイード, エドワード, 1986. 『オリエンタリズム』 東京: 平凡社. (原著 Said, Edward,  
1978, *Orientalism*, New York: Pantheon Books.)
- 清水 展. 2014. 「応答する人類学」 山下晋司 (編) 『公共人類学』 東京: 東京大学出版  
会.
- . 2013. 『草の根グローバリゼーション: 世界遺産棚田村の文化実践と生活戦  
略』 京都: 京都大学学術出版会.